

登山と山岳信仰の歴史

くじゅう連山の登山はいつから始まったのか、山岳信仰の歴史を紹介します！

【登山のはじまり】

山は水がはじまるところであることから、古くから水分神（みくまりしん）がいること考えられ、各地で水源信仰が発達してきました。

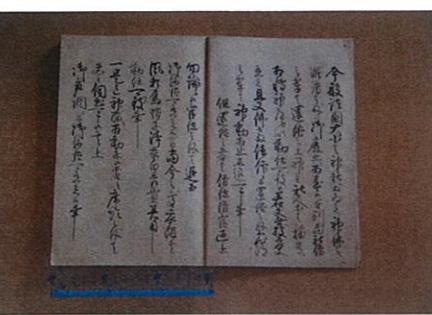
くじゅうでは、中岳直下の御池（みいじゆう）が隣接する空池より標高的に高い場所に位置するにもかかわらず年中涸れることがないことから、水源信仰の対象となりました。しかし、人が命を落とすような大きな力をもつたものと考えられていましたが、仏教が伝来することで、あらぶる神は仏の慈悲によって鎮められるようになりますが、山の神が穏やかな仏の表情をして現れた姿が各所でみてとれます（神仏習合）。

最澄や空海などが800年以降に密教の考え方（即身成仏…いま生きているこの身のまま、仏になることができる）を日本にもたらすとともに、山林を歩きまわることで、自ら悟りを開こうとする行為が盛んにおこなわれるようになります（神仏習合）。

猪鹿狼寺は、くじゅう連山の南側に位置し、本堂跡は南登山道沿いに残っています。猪鹿狼寺の寺号は動物の名前を連ねたユニークな名前ですが、別冊旧記録にはその由来について記載があります。文治二年（1186）源頼朝の富士の牧狩り（草原に火を放ち、獲物を集め生禁断の地であつた久住山において牧狩りを行つたところ、おびただしい獲物がとれたことから、畜類供養としての頼朝公の寄付に恩徳を感じて、猪鹿狼寺と改名したとあります。草原での牧狩りと山岳信仰の関係が見えてくる興味深い史料です。

【猪鹿狼寺の寺号】

いからじ



▲下野狩図(貞享元年(1684))



▲九重山記(明和7年(1770))



▲硫黄山の硫黄

【明治時代を境に】

明治時代以降、神仏分離が行われ、くじゅうだけでなく全国の山々で山岳信仰の拠点であつた多くの寺院がなくなりました。くじゅう連山の各所では、現在も山岳信仰の名残である祠の跡や、石碑、仏像などが点在しています。レジャーとしての登山も楽しいですが、かつての神聖なくじゅうの山の歴史に思いをはせてみると、また違う感覚で山を楽しめることだと思います。

【金山坊の登場と硫黄山を巡る争い】



正保二年(1645)肥後藩領から見た、くじゅう地域を描いた絵図の写し
(長者原ビジターセンター展示中)



▲中岳直下の御池



▲猪鹿狼寺
本堂跡



▲摩崖仏の例
(熊野摩崖仏)

【くじゅう連山の山岳信仰】

もっと知りたいあなたに

九重山法華院物語 山と人
松本信人・鈴木秀之編

くじゅう連山の法華院を中心とした山と人に関する記録。
九重山記も全文掲載。
くじゅうの歴史入門編
2020年夏号

文政六年（1823）に記録された別冊旧記録では、「久住山は、九州第一の高山靈水である」とことや、くじゅう連山南麓に位置する猪鹿狼寺について、「伝教大師が延暦二三年（785）に、渡唐帰朝の際に持ち渡した十一面觀世音を安置し、大和山慈尊院と号した」とのこと、「山を上宮と崇め、下宮の本宮を嶽宮と号したこと、「坊中十六院があつた」と、「天正年中（1573～1593）の兵乱により、坊中は残らず退転してしまった」ことなどが記載されています。当時山中に十六院ものお寺が安えていたとは驚きですね。

正保六年（1721）の玖珠郡田野村村帳では、硫黄山の燃えているところに、九重山大明神を崇めており、この山を九重法花院（法華院）花水寺といい、守山伏の金山坊も麓の村の中に入る、と記録されています。寛永九年（1632）に、火薬の原料となる硫黄の産出をめぐって、天領（金山坊）・岡藩（法華院）・肥後藩（猪鹿狼寺）で硫黄山を三分割する出来事が発生しており、寺院が山岳信仰を保持しつつも、山上における硫黄の見張り役を行つていたことがわかります。

くじゅう連山でも中岳直下の御池を中心とした山岳信仰が栄えました。文献では特に、山岳信仰が栄えたとされる「ほつけいん」（金山坊）、猪鹿狼寺（いからじ）、猪鹿狼寺（きんざんぼう）の3つの寺院についての記録が残っています。くじゅう連山の登山はいつから始まったのか、山岳信仰の歴史を紹介します！